

連携動物病院制度の

ご案内

当院は疾患動物に一貫性のある獣医療を提供するために、地域の動物病院と相互に医療連携・コミュニケーションを図ることを目的として「連携動物病院制度」を取り入れています。

連携いただいた先生方には、下記のサービスを提供させていただいております。

※これらの提供サービスには、一切費用・義務は発生いたしません。

- 当センターのウェブサイト「連携動物病院検索」に病院情報を掲載
- 当センターから「連携病院の証明書」を発行
- 当センターから「学術情報・セミナー情報等」を配信
- 紹介いただいた症例について、当センターにおける「診療・手術」の見学受け入れ

※事前に飼い主さまからの同意をいただくようお願いいたします。

連携お申し込み方法

電話またはメールにてご連絡

日本動物高度医療センター 川崎本院
 担当：管理部 連携病院担当

メール kikaku@jarmec.jp

電話 044-850-1320

専用フォームよりお申し込み



フォームにて必要項目の入力をお願いいたします。
 申し込み完了後、当グループより、申し込み完了のご連絡と当グループのパンフレットをお送りいたします。

本誌とともに送っている
 テラシ・パンフレットもぜひご覧ください。

上記 QR コードから
 同封パンフレットの追加発注もできます



JARMeC NEWS

Japan Animal Referral Medical Center

2023 SEPTEMBER No.17

特集

大阪病院開業

コーポレートアイデンティティ (CI) 策定のお知らせ



TOPIC

当グループのウェブサイトとパンフレットが
 リニューアルしました!



大阪病院が 開業しました

2023年6月、大阪府箕面市にJARMeCグループ
4つ目となる大阪病院を開業しました。
川崎本院・東京病院・名古屋病院と同様、二次診療
を担い、地域の動物医療を支え、動物とともに生きる
人々の希望となれるよう邁進します。



ロビー・ラウンジ



診察室



ラウンジ



手術室前室



院長ご挨拶



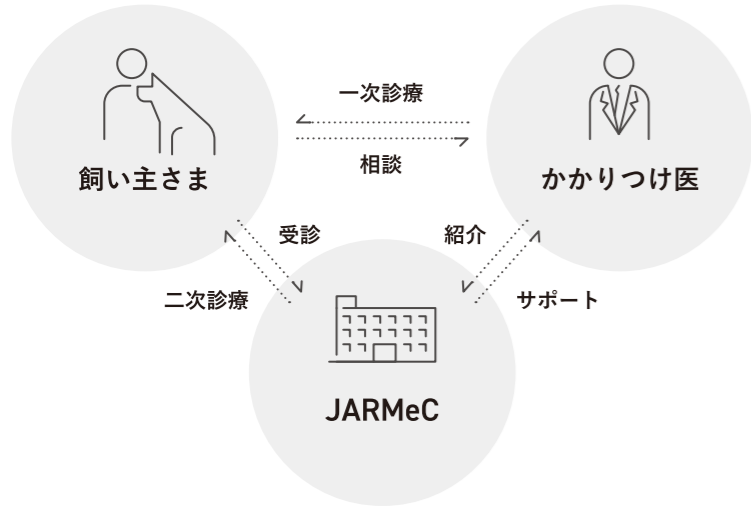
2023年6月より、大阪病院院長に就任いたしました柴崎 哲と申します。
私は大学院修了後、1999年より大阪府立大学(現大阪公立大学)へ赴任し、初めて大阪の地へと転住して参りました。当時、若輩であった私を関西開業の先生方は大変暖かく迎えて下さり、たくさん症例を経験させていただきました。2005年より東京へと戻りましたが関西でのニーズを強く感じ、2008年に再び豊中市にて循環器専門病院を開業し現在に至っております。このたび私事ながら環境の変化に対応するべく、大役をお引き受けすることとなりました。

大阪病院は、川崎本院、名古屋病院、東京病院に続く4番目の病院となります。この4院は統合的に運営されており、一括したスタッフ育成、オンラインカンファレンス、専門治療における人材派遣など、1つの医療センターとして稼働しています。またそれぞれの診療科スタッフは高い専門性のみならず、科をまたいだ診察ができるよう柔軟に対応しています。

関西の先生方には、四半世紀来の恩返しをする機会ではないかと考えております。近くへお越しの際はぜひ内覧いただき、症例ご紹介先の選択肢にぜひ加えていただければ幸いと存じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

大阪病院 院長 柴崎 哲

動物医療体制について



一次病院のみならず動物医療のできないをなくす

当院は、二次診療を専門とした動物病院です。かかりつけ医である一次病院のみならずからの紹介を受けた患者さまのみ、診療を受け付けています。「動物医療の『できない』をなくし、動物とともに生きる人の希望になる。」を使命に、犬・猫向けの高度医療を行う二次診療サービスを展開しています。できる限り多くの症例に対応すべく、専門性の高い、幅広い診療科を設置し、疾患動物にとって最適な検査・診断・治療を提供できるよう、年中無休で診療しております。

高度な医療機器や設備を整えています



大阪病院ではMRI・CTをはじめとした検査機器はもちろん、放射線治療装置(2024年稼働予定)やX線透視装置(X線TV・Cアーム)、各種内視鏡や腹腔鏡、超音波検査装置や人工心肺装置など、各種疾患の診断や治療を可能とする検査装置を備えています。また、緊急性の高い症例にも随時対応できるよう、4つの手術室を完備しています。これらの設備を駆使して、専門性の高い各診療科がさまざまな症例に対応するべく全力を尽くしています。

検査・治療機器

- MRI(1.5T) ■ MDCT(64列)
- 放射線治療装置
- X線検査(DR) ■ X線透視(X線TV・Cアーム)
- 内視鏡(太径/細径) ■ 腹腔鏡 ■ 超音波検査
- 心電計/24時間心電計 ■ 人工心肺装置
- 臨床検査センター(サンリツセルコバ)併設

大阪病院 診療科



患者さま紹介の流れ

詳しくは病院サイト「患者さま紹介の流れ」をご確認ください

- 1 お電話またはFAXでご予約**
 症例情報や受診希望の診療科などをお伺いし、予約可能日をご案内します。診療予約フォーム*をFAX等でご提供いただくこともできます。この場合、予約日等を調整しこちらから折り返しご連絡します。
- 2 予約確定資料のお渡し**
 予約確定資料をお送りします。内容をご確認いただき、飼い主さまへお渡しください。
- 3 診療情報をご提供ください**
 お電話でお伝えいただいても、診療予約フォーム*や検査結果などのご提供をお願いしています。
- 4 診察結果報告・引き継ぎ**
 当院にて診察後、紹介病院さまへ診療結果のご報告や治療後の引き継ぎをいたします。

*診療予約フォームはウェブサイトよりダウンロード可能です

日本動物高度医療センター 大阪病院

TEL 072-730-0070
FAX 072-730-0071

〒562-0036
大阪府箕面市船場西 3-14-7

詳しくは Webへ



コーポレートアイデンティティ (CI) を策定しました

JARMeC グループでは昨年 15 周年を迎え、今年新たに大阪病院を開院しました。

この節目において、かかりつけ医のみなさまとともに動物医療における課題を解決し、動物とともに生きる人々を支えていきたいという思いを、今後さらに届けてゆくために、当グループ内で同じ目標に向かって推進してゆくことが重要と考えました。

そこでこの度、会社の目指すミッション・バリューの策定を行いました。

私たちの思い

どんなにカラダは小さくとも、
言葉で会話はできなくても、
かけがえのない家族の一員だから。
もしケガや病気になったときは、
できる治療のすべてを受けさせてあげたい。
それが動物と人生をともにする
多くの飼い主さまの願いではないでしょうか。

2005 年の創業以来、JARMeC は、
人と変わらぬ最先端の医療設備や技術を追及してきました。
365 日、かかりつけ医のすぐそばに控える高度医療サービスを中心に、
あらゆる場面で動物の健康を支えています。

飼い主さまの不安や期待に寄り添い、手を尽くすだけでなく、
スタッフ一人ひとりが誠心誠意、心まで尽くすこと。
ときにそれが、救えない命だったとしても、
「幸せな日々だった」と思える日が来るように。
かかりつけ医とともに、一つのチームとなって、
飼い主さまの思いに応えていきます。

「ミッション」

動物医療の「できない」をなくし、
動物とともに生きる人の希望になる。

これまで、私たちはかかりつけ医である一次病院のみなさまが安心して紹介でき、飼い主さまが期待して受診し結果に納得していただける二次診療機関として、充実した動物医療体制を地域のみなさまと構築することに注力してまいりました。これは2007年の開業以来一度も変わることなく、そしてこれからも変わることのない私たちの思いです。

開業から16年、動物とともに生きる人々を支えるなかで、動物医療におけるさまざまな『できない』に直面してきたからこそ、かかりつけ医である一次病院のみなさまと共に向き合い、そしてJARMeCが動物医療の世界でいつでも頼れる、希望となることを目指し、スタッフ一同が挑戦し続けることができるよう、この『ミッション』を策定しました。

「バリュー」

365日、かかりつけ医の
すぐそばにいる高度医療チーム

専門性

臨床を中心としながらも症例研究を積極的に行い、つねに技術や知識の向上に努めることでより確実性の高い医療と、幅広い選択肢を提供します。

人間味

飼い主さまが抱く不安や苦しみをできる限り軽減させ、ここに預けてよかったと思っただけのように、スタッフ一人ひとりが真心を込めた対応で寄り添います。

一体感

さまざまな専門性を持つ獣医師やスタッフが、かかりつけ医と一つのチームとなって連携しながら、ともに動物の命に向き合います。

開業以来の思いをもとに策定したミッションを言葉だけで終わらせないため、JARMeCスタッフ一同がこの思いを体現できるよう『バリュー』を策定しました。私たちはこれをJARMeCスタッフの理想の行動とし、ミッションを達成するべく、日々努力と研鑽を重ねていきます。

私たちは二次診療機関として、365日、かかりつけ医である

一次病院のみなさまのすぐそばにいる高度医療チームとして、医療技術や知識の向上に努めるだけでなく、動物とともに生きるすべての人々の気持ちに寄り添い、『紹介して良かった』『受診して良かった』と思える動物医療の提供を、すべての専門スタッフが連携し一丸となって行います。

循環器・呼吸器科

呼吸に苦しむ動物たちを救う

心臓弁膜症や心筋症、気管や胸膜の腫瘍・感染症など、心臓や肺にかかわる疾患の診療を行っています。疾患に合わせた検査で診断し、内科治療のほかペースメーカー設置や気管内ステント外科治療も行っています。

麻酔・集中治療科

重篤な疾患動物への多角的なサポート

各科の手術・検査の全身麻酔を担うほか、全身状態の悪化した疾患動物が治療を継続できるよう多角的にサポートします。高度医療機器や各種モニターを併用し全身状態を管理、重篤な呼吸不全等には、人工呼吸器での呼吸管理も実施しています。

症例紹介 頸部気管虚脱に対する気管外プロテーゼを用いた外科的矯正術

疾患動物情報	犬 11歳8ヶ月齢 ヨークシャーテリア 4.4kg
--------	------------------------------

主訴 病歴	呼吸困難
----------	------

頸部気管虚脱とは

小型の犬(ポメラニアンやヨークシャーテリアなど)において遭遇することが比較的多い疾患であり、気管が平坦化した結果、咳や呼吸困難を引き起こす。重篤な例では肺水腫の発症といった致死状況に陥る場合もあることから、積極的な治療が必要とされる。症状に対する治療としては酸素室でのケージレストやステロイドなどを用いた内科的な治療から、自己拡張性のステントを用いた気管拡張術や気管外プロテーゼを用いた外科的矯正術が選択される。

症例

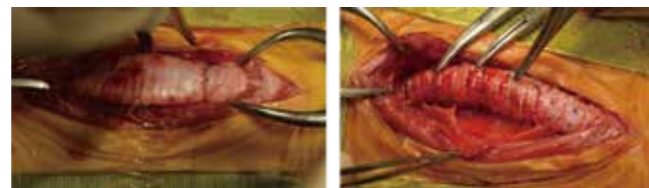
11歳8ヶ月齢のヨークシャーテリア、4.4kgのオス。喘息のような呼吸様式になり2日ほど様子を見ていたが症状の悪化を認めたため紹介医を受診した。紹介医での検査にて頸部気管の虚脱を認め、内科的治療による症状の軽減が得られたため当センターまでの移動が可能と判断し、4日後当センター受診となった。来院時の症例はいわゆる「ガチョウの鳴き声」のような異常呼吸音を伴う呼吸困難を呈していた。

診断と治療

X線検査、CT検査、気管内視鏡検査といった画像検査より、重症度ではグレード4に相当する頸部気管虚脱と診断した。気管外プロテーゼを用いた外科的矯正術を実施し、術前の呼吸困難の症状は消失した。



X線検査



術中写真



術後X線検査

診断と治療

気管虚脱に対する治療として当センターでは気管内ステント設置術と気管外プロテーゼによる外科的矯正術を実施している。気管内ステントは、ステントサイズの選択が難しく、サイズが合わなければステントのずれの原因となりうるリスクがある。一方、気管外プロテーゼは気管内に異物を残さないため、気管への刺激が少なく、術後に麻酔が必要になる際も比較的容易に挿管ができる(ステントをずらしてしまうリスクがない)。このように当診療科では治療のメリットとリスクを評価し各症例治療に臨んでいる。

本稿の執筆者

循環器・呼吸器科 医長

さ さ き た か ふ み
佐々木 崇文

東京農工大学農学部獣医学科卒業。博士(獣医学)。日本獣医循環器学会認定医。2011年に日本動物高度医療センターに入職。

症例紹介 ショックを呈する重症患者の周術期循環管理

疾患動物情報	犬 12歳8ヶ月 雑種 8kg
--------	--------------------

主訴 病歴	急性の嘔吐 食欲廃絶 活動性低下 発熱
----------	------------------------

概要

日本動物高度医療センターでは、外科手術が必要な重症例に対して周術期を通じた集中的入院管理を実施しています。今回は、周術期に重度低血圧を伴うショック病態を呈したものの、生存退院が可能であった消化管穿孔の症例を紹介させていただきます。

術前管理

上記主訴の精査のため来院。各種検査から消化管腫瘍に伴う消化管穿孔が強く疑われました。低血圧を伴う重度ショック状態を呈していたため、バイタルの安定化後に手術を計画しました。来院直後から酢酸リンゲルによる輸液蘇生と抗菌薬投与を実施しましたが、平均血圧は60 mmHgを下回り、低血圧は改善しませんでした。そこで、ノルアドレナリン NAの持続点滴を併用し、平均血圧>65 mmHgを維持したところ、意識状態や末梢冷感の改善を認めました。



消化管腫瘍と腹膜炎所見を伴う腹水貯留

術中管理

フェンタニルを静脈内投与後、まず観血的血圧モニタリングのために動脈留置を設置しました。麻酔はプロポフォルで導入後、イソフルランにて維持しました。麻酔導入中から血圧の低下を認めたため、NAを増量したものの、十分な昇圧が得られませんでした。輸液反応性や簡易超音波検査から循環血液量は十分であると判断し、さらにバソプレシンとアドレナリンの持続点滴を併用し血圧を維持しました。

術後管理

麻酔覚醒後も、循環作動薬から離脱できず、意識レベルも傾眠でした。そのため、入院室でも観血的血圧モニタリングを継続しました。簡易超音波検査では、心内腔の狭小化と胃内液体貯留を認め、循環血液量の低下が疑われました。そこで、新鮮凍結血漿を投与したところ、投与開始後から血圧は上昇傾向を示し、意識レベルの改善と尿量の増加を認めました。その後、循環作動薬を順次漸減し、最終的に3剤全てから離脱しました。手術翌日も血圧をはじめとするバイタルは安定し、術後2日目から食欲も自力摂食が可能なレベルまで改善、最終的に大きな術後合併症なく退院しました。

考察

本症例の生存退院に寄与した要因の一つに、周術期を通じた循環管理が挙げられます。獣医学領域では情報が少ないものの、医学領域では低血圧が周術期合併症の発生率を増加させることが明らかになっています。今回は循環管理にフォーカスしましたが、実際は多角的に全身の生体機能をモニタリング・治療することが求められます。当センターでは栄養管理や疼痛管理、リハビリテーションなどにも積極的に取り組んでおり、愛玩動物看護師と連携した愛護的入院管理も非常に重要であると考えられます。



実際の集中治療の様子(別症例)

本稿の執筆者

麻酔・集中治療科

こ じ ま か ず き
小島 一輝

北海道大学獣医学部獣医学科卒業。同大学院にて博士号取得後、2022年に日本動物高度医療センターに入職。

泌尿生殖器・ 消化器科

各種画像診断と安全性の高い手術

消化管、肝臓などの消化器、腎臓、尿道などの尿路系、子宮や前立腺などの生殖器の診療を行っています。一般的な内科治療のほか、肝臓腫瘍や肝外胆道系疾患、尿路上皮がんへの外科治療など、難易度の高い手術にも対応しています。

脳神経・ 整形科

痛みを改善させ、元気に動き回れるように

歩行の異常や四肢の痛みなど、今までと異なる動きの原因を検査等で病態を把握し、脳神経か運動器かの原因に合わせて治療を提案いたします。内科治療はもちろん、外科治療では整形科分野の大半の手術が実施可能です。

症例紹介 肝外胆管より発生した犬の胎児型横紋筋肉腫の1例

疾患動物情報
犬 14歳7ヶ月 去勢オス
ミニチュアシュナウザー

主訴病歴
食欲廃絶 嘔吐
黄疸 肝酵素上昇

犬の胎児型横紋筋肉腫について

横紋筋肉腫は未分化間葉系細胞に由来する悪性腫瘍であり、骨格筋へ分化し多様な組織形態を示す腫瘍である。今回、肝外胆汁鬱滞を起こした高齢犬において、これまで報告のない胆管由来の本症を経験したため、診断経緯・臨床的特徴について概要を報告する。

検査所見

血液検査：ALT:1537 U/L, AST:652 U/L, ALP:7860 U/L, GGT:364 U/L, Tcho:489 mg/dl, Tbil:0.7 mg/dl。腹部超音波検査：総胆管の拡張(7-8 mm 径)、軽度の壁肥厚と大十二指腸乳頭の肥大(8-9 mm 大)を認めた。総胆管遠位の不完全閉塞と胆汁鬱滞性肝障害と評価した。

手術

鬱滞解除および診断的生検のため外科手術を決定した。開腹後、胆嚢から総胆管の順行性造影を行い、造影欠損と末端部における通過障害を確認した(図1)。十二指腸切開を行うと、大乳頭部は粘膜側へ大きく隆起していた。5Fr 栄養カテーテルの挿入ができたため乳頭筋切開を行うと、胆管内から胆汁と半透明ゼリー状の組織が排出された(図2)。このような組織はフラッシュや胆管のマッサージで繰り返し回収されたが、なお管内腔に残存組織を触知したため、内視鏡による観察を試みた。乳頭筋切開部から総胆管へ細径内視鏡(外径2.8mm)を挿入

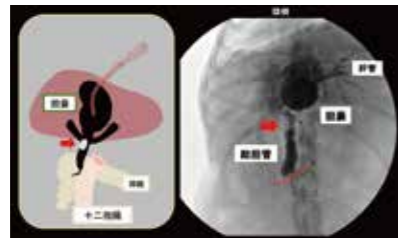


図1 胆道造影

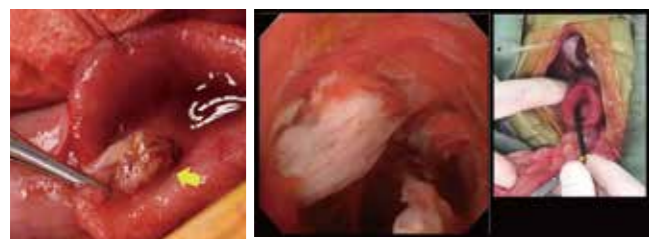


図2

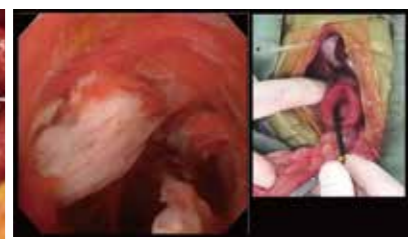


図3 細径内視鏡

すると、壁面を覆う様に塊状～線維様の組織が緩く付着していた(図3)。これら脆弱な組織を可能な限り回収し、最後に胆道造影で十分な疎通性を確認し手術を終了した。

診断

総胆管内組織と乳頭筋周囲の粘膜固有層は消化管間質腫瘍(GIST)と評価された。しかしckitの染色性は弱く、本腫瘍の特徴的な増殖形態や総胆管に浸潤するGISTの報告がないことから、消化管由来ではない腫瘍の可能性を検討した。追加した免疫組織化学検査では、筋系マーカーのデスミンに対して約1/3の細胞が強陽性を示した。他の筋系マーカー(Myoglobin, MyoD1, αSMA)は陰性を示し、神経系(S-100)および上皮系マーカー(AE1/AE3)に陰性であった。以上より、本腫瘍の鑑別は横紋筋や平滑筋由来の間葉系腫瘍となり、その特殊な形態と組織学的細分類により胎児型横紋筋肉腫と確定診断された。

経過

臨床兆候は術後速やかに改善した。追加治療はご家族の意向で行わず、術後第155日に胆汁鬱滞が再発した。腫瘍の動向は、明らかな遠隔転移はなく緩徐な局所増大であった。肝障害の悪化と共に食欲不振と消瘦が進行し第219日に自宅で亡くなった。

考察

本症例は犬における胆管由来の横紋筋肉腫の初の報告例である。胆管内に増殖した脆弱な組織が閉塞物となる稀な病態であった。術後の検索により、観察し得た肉眼所見は他部位に発生した本腫瘍の特徴に類似することが判明した。術中内視鏡は初回手術での介入範囲を決定するだけでなく診断にも重要な役割を果たし得たことから、今後も術中に管内のびまん性病変を疑った場合は、選択肢の一つとして考慮すべき有用な方法と考えられた。

本稿の執筆者

泌尿生殖器・消化器科医長

あかまつ まさる
赤松 大

北里大学獣医学部獣医学科卒業。都内動物病院、宮崎大学消化器科勤務を経て、2019年に日本動物高度医療センターに入職。

症例紹介 骨嚢胞に対するセメント充填術

疾患動物情報
犬 1歳
Mix犬(ポメラニアン×ダックスフンド)

主訴病歴
左後肢跛行

犬の骨嚢胞について

骨嚢胞は主に四肢の長骨に発生する嚢胞状の病変であり、犬では非常に稀な疾患である。大半の骨嚢胞は無徴候であり偶発的に発見されるが、少数ながら進行の早いパターンも存在する。嚢胞の存在する部位では物理的強度が著しく低下するため、病的骨折をいかに防ぐかが治療のポイントとなる。

症例

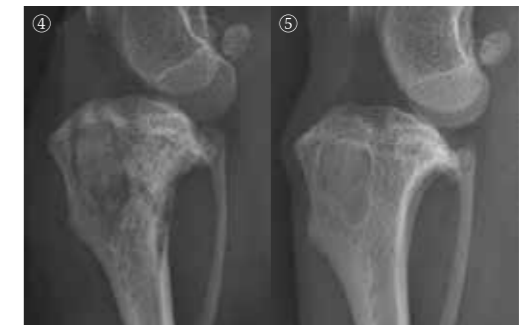
1歳齢のMix犬(ポメラニアン×ダックスフンド)、左後肢跛行を主訴として紹介元病院を受診した。X線検査で左脛骨近位に透過性の高い領域が確認され、その後この病変が顕著に拡大し、跛行も悪化していった。CT検査では脛骨近位の皮質骨が著しく菲薄化、あるいは欠損していること、病変の内部には充実性の構造が存在しないことが示唆された。生検が必要と思われたが、病的骨折のリスクがかなり高い状態になっていたことから、オープンバイオプシーを実施することとし、同時に嚢胞部を物理的に補強する方針とした。



①紹介医初診時の脛骨近位 ②当センター初診時(①から4週間後) ③CT画像処理による3D像

手術

最も皮質骨が欠損していた脛骨の頭外側面から嚢胞へアプローチした。嚢胞を取り囲む被膜状の病変を摘出して内腔を観察すると、若干の血液がある程度ではほぼ空洞だった。嚢胞を内張りする組織をできる限り搔爬し、嚢胞内腔への骨セメント充填を実施した。



④手術直後 ⑤術後1年

診断と経過

病理組織学的検査では骨嚢胞と診断された。術後1か月では歩様も概ね正常化し、X線検査においても悪化はなく骨セメントと骨組織の間隙が消失してきていた。その後も加療を伴うような合併症はなく、術後1年には跛行は完全に消失し、骨セメントは骨皮質の中に埋没しているように観察された。

考察

本疾患は急速に嚢胞が拡張していく珍しいタイプの骨嚢胞であった。骨嚢胞に対する手術法としては、病変の切除や搔爬は不可欠であるが、その後に行う病的骨折への対策として、人工骨の埋め込み、プレートなどのインプラントによる補強、そして骨セメント充填などが報告されている。今回は骨セメント充填で大きな合併症を生じることなく十分な結果を得られたが、負重骨に対する骨セメント充填で十分な強度が得られるか否かについては議論もあり、他法の併用などについても今後検討していく必要がある。

本稿の執筆者

脳神経・整形科医長

えちご りょうすけ
越後 良介

東京大学農学部獣医学専修卒業。博士(獣医学)。大学院修了後、東京大学北海道大学で約11年、助教、講師を歴任。2020年に日本動物高度医療センターに入職。

腫瘍科

Evidence based medicine の実践

問診や身体検査、生検による確定診断、血液検査、CT 検査など各種画像検査を併せて病期ステージングを行います。外科全般治療のほか、免疫療法や放射線治療等を単独または組み合わせた集学的治療を行っています。

放射線・画像診断科

専門的な診療のための適切な画像診断

当センターでは、X線検査、超音波検査、MRI、CT などを使った多くの画像検査を行っています。また、放射線腫瘍学と画像診断学を専門とする担当医による適切な照射範囲の決定と照射プランの作成、治療計画に沿った正確な照射を行っています。

症例紹介 口腔悪性黒色腫

疾患動物情報 犬 9歳9ヶ月 去勢オス 雑種犬

主訴病歴 食欲低下 流涎 4cm 大の歯肉腫瘍

犬の悪性黒色腫について

犬の口腔腫瘍の一つである悪性黒色腫は犬の腫瘍全般の中でも比較的発生が多く、局所浸潤性に加え遠隔転移率が高いことで知られる。さらに病変からの出血や悪臭、疼痛、食欲減退など患犬のみならず、オーナーにとっても臨床的な不利益が顕著であるため、局所進行例であっても緩和的な外科治療が考慮される。犬は一般に顎骨切除によく耐え自力採食は維持されるが、外科適応外と判断された場合には放射線治療の選択肢もある。

症例

9歳9ヶ月齢の雑種犬、去勢オス、食欲低下と流涎を主訴に近医を受診し4cm大の歯肉腫瘍を指摘され当院を紹介受診した。麻酔下での肉眼観察や触診、CT検査による顎骨の評価、組織生検によステージングを実施した結果、下顎骨の広範囲な融解を伴う軟部組織病変を確認した。生検結果から悪性黒色腫、T3N0M0、臨床ステージⅢと診断した。



術前肉眼所見

治療

下顎片側全切除とリンパ節摘出生検を提案し実施した。組織学的な切除マージンは一部不明瞭と診断され、また遠隔転移性の高い腫瘍であることから、術後補助療法としてカルボプラチンを用いた化学療法を選択し、現在治療継続中である。



術後肉眼所見



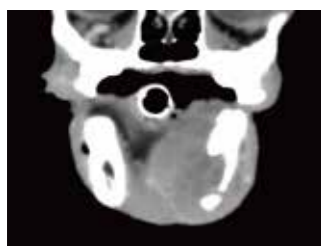
切除肉眼所見

経過

術後2か月経過した現在、一般状態や採食に問題はなく、また明らかな再発や転移は確認していない。

本稿の執筆者

腫瘍科 医長 岡野 久美子
宮崎大学農学部獣医学科卒業。日本獣医がん学会獣医腫瘍科認定Ⅱ種。2009年に日本動物高度医療センターに入職。



CT検査 造影軟部条件



CT検査 骨条件

症例紹介 鼻副鼻腔腫瘍の画像診断

犬の副鼻腔腫瘍について

鼻副鼻腔腫瘍は稀な疾患であり、犬では全腫瘍中その割合は1-5%程度とされています。一般的な初期症状は、くしゃみ、鼻汁、鼻出血、鼻閉で、進行すると顔面の変形、眼球の変位、あるいは頭蓋内への進展により発作等の神経症状が認められるようになります。ただし、篩板付近(脳との境界)で発生したような場合、鼻腔症状を全く伴わず、いれん発作の原因精査で鼻腔腫瘍が判明することがあります。このページでは鼻副鼻腔腫瘍の画像診断について実際の症例の画像を示してご紹介します。

症例 1

この症例では、単純X線検査画像と単純CT画像の比較を示します(図1)。単純X線画像では、右鼻腔に鼻甲介や骨の一部の吸収を伴う占拠性病変の存在が示唆されます。CTでは、右鼻腔に進行した骨吸収を伴い周囲に進展する占拠性病変が認められ、T3/Stage4の鼻副鼻腔腫瘍が示唆されます。CTでは病変の進展状況をより詳細に把握できることがわかります。

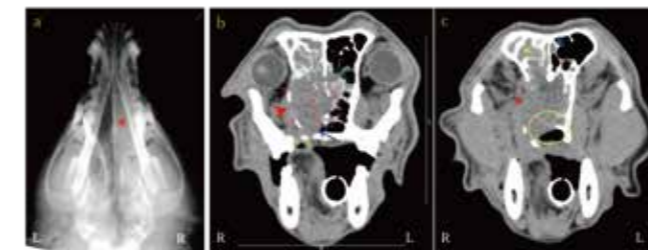


図1-a 単純X線画像(DV) 右鼻腔に瀰漫性不透過性亢進陰影と鼻甲介の不明瞭化(*)が認められる。また、右鼻腔尾側の眼窩(→)、左鼻腔(←)、後鼻腔(→)境界における骨の不明瞭化(→)が認められる。
図1-b 単純CT(横断像) 右上顎骨の吸収と mass effect (→)、鼻中隔および鋤骨の一部の吸収(→)、病変の右眼窩(→)、左眼窩(←)への進展、右前頭洞内の占拠性液体貯留(*)、左前頭洞の微量の液体(→)が認められる。
図1-c 単純CT(横断像) 病変の右眼窩(→)、鼻頭および蝶形骨洞(○)、頭蓋内(→)への進展、右前頭洞内の占拠性液体貯留(*)、左前頭洞の微量の液体(→)が認められる。

症例 2

この症例では、CTとMRIの比較を示します(図2)。鼻腔腫瘍に対する画像診断において、CT/MRIはいずれも非常に重要な検査です。一般的にMRIは軟組織のコントラストに優れており、特に鼻腔腫瘍が頭蓋内に進展して神経症状を呈しているような場合では、状況をより正確に把握できると考えられます。その一方で、検査時間が長いこと全身麻酔の負担がCTよりも大きくなる可能性がある

ことや、転移病巣の有無を含めて一度に全身を精査するには向かないなどCTと比較しての欠点も存在します。鼻腔腫瘍はそのほとんどが悪性腫瘍であり、診断時の転移率は低いものの転移の有無は予後に影響することから、少なくとも治療方針の決定に際しては、全身CTを撮影することが勧められます。

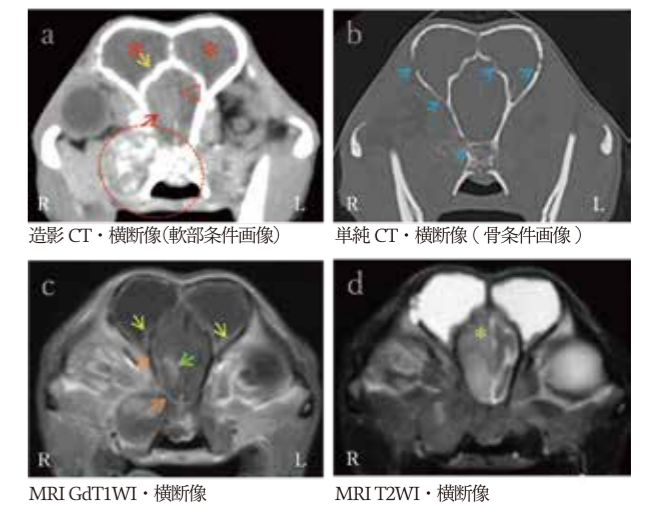


図2 鼻副鼻腔腫瘍症例におけるCT画像とMRI画像の比較
CT、MRIに共通して前頭骨および前蝶形骨の吸収(→)を伴う腫瘍病変の蝶形骨洞から眼窩、鼻頭頭背部、右側嗅球への進展(→および←)、前頭洞の液体貯留(*)と前頭洞粘膜の肥厚(→)、嗅球における軽度のミッドラインシフト(矢頭)が認められる。前頭洞粘膜の肥厚(MRI・GdTIWIでより明瞭→)、前頭骨の吸収(単純CT骨条件でより明瞭→)、右嗅球浸潤病変辺縁(MRI・GdTIWIでより鮮鋭→)、右嗅球から右前頭葉の脳浮腫(MRI・T2WIでより明瞭、*)、右側を中心とした嗅球レベル脳膜の造影増強(MRI・GdTIWI→)所見に両検査で差がみられる。

考察

鼻副鼻腔腫瘍は、CTの正診率が非常に高い(96~98%)疾患です。このため、特に腫瘍性疾患が疑われる場合、CT検査は重要な診断ツールと考えられます。また、鼻腔症状と神経症状の両方を呈しており、鼻腔腫瘍の頭蓋内浸潤が疑われる場合は、MRIも同時に実施するなど、状況に応じてMRIを組み合わせることで、より正確な診断ができると考えられます。

本稿の執筆者

腫瘍科 / 放射線・画像診断科 菅井 匡人
帯広畜産大学卒業。第1種放射線取扱主任者。東京大学大学院農学生命科学研究科研究員を経て、2008年に日本動物高度医療センターに入職。

JARMeC グループからのお知らせ

JARMeC グループでは、犬猫向けの高度医療サービスを提供する二次診療病院のほか、動物医療の可能性を広げるため、さまざまな取り組みを行っています。

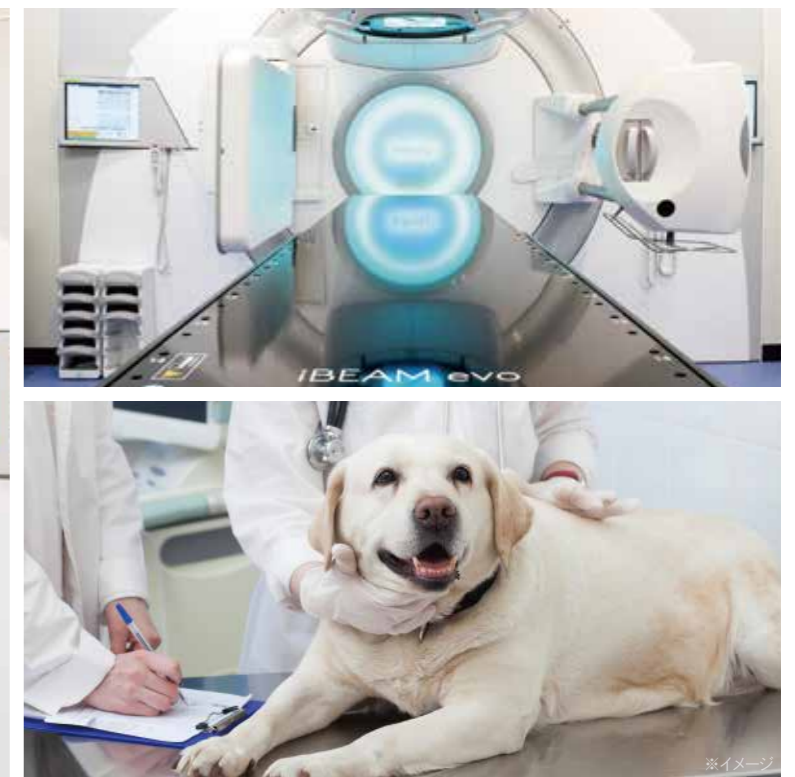
川崎本院

放射線治療装置が新しくなりました

川崎本院にて、装置移設のために今年4月より放射線治療を目的とした疾患動物の受け入れ停止しておりましたが、放射線治療装置入れ替えが無事完了し、予定通り7月10日から診療を再開いたしました。

今回導入したのは「Elekta Infinity」で、一般的な高エネルギー放射線治療だけでなく、強度変調放射線治療(IMRT / VMAT)といった高精度放射線治療も安全かつ効率的に行えることが特徴です。kVイメージングシステムにより高画質なCBCT画像を用いた正確かつ迅速な位置合わせが可能で、強度変調照射との組み合わせにより正常組織への線量低減とターゲットへの線量集中が両立できるようになりました。

当院では実績豊富な医師がこれらの治療機器を活用し、最適な治療を提供いたします。難しい位置にあるものや小さなものなど、治療が難しいとあきらめる前に、ぜひ一度ご相談ください。



グループ

ウェブサイトとパンフレットをリニューアルしました

この度、ウェブサイトとパンフレットをリニューアルしました。

ウェブサイトはグループの想いや事業内容、IR情報等を発信するコーポレートサイトと、グループに所属する4病院の情報やお知らせ等を発信する病院サイトの2つに分かれました。情報を必要とする方へ、すぐに届けられることができるよう、これから積極的に発信していきます。

パンフレットでは飼い主さま向けの情報をまとめ、病院の特徴やご予約・ご来院方法のご紹介をしています。ぜひ飼い主さまを当グループへご紹介いただく際に、ご案内用としてご利用ください。

▼コーポレートサイト



コーポレートサイトはこちら

▼病院サイト



病院サイトはこちら

パンフレット ▶

製品紹介

PLUS CYCLE

動物病院がつくった、犬猫用活動量計

2つのセンサーで
早期発見・治療の効果測定を実現

3軸加速度センサーで「走る・歩く・寝る・遊ぶ」などの活動を記録、気圧センサーでジャンプ回数を正確に測定



- ✓ 犬猫の生活に合わせた設計
- ✓ 飼い主さまはアプリで記録するだけ
- ✓ 対応病院でデータを簡単に詳しくチェック
- ✓ データは専用デバイスで自動同期

セット価格 15,500円
(税込 17,050円・送料無料)



詳しくは
公式サイトへ

関連事業

- 新製品のご案内 -



濃度可変機能付き 酸素濃縮器 H23型

日本初の新機能 /

新型器 H23 は濃度可変機能が付いたため
窒素ポンプ等を設備しなくとも、
最大流量 3L (1/2/3 1L 単位) で 30 ~ 90% の
酸素濃度を得ることが出来ます。



動物用 ICU の酸素源として
最大 14L、50%O₂ の酸素を発生

動物用麻酔器の酸素源として
30 ~ 90%O₂ まで任意に酸素濃度の設定が可能

安心・安全
IOT 機能、通信による性能確認が可能

軽量・静音設計
約 17kg、40dB(A)

麻酔器における酸素濃度調節について

人の気管内麻酔では酸素・窒素を混合して麻酔が行われますが、その理由は純酸素麻酔による無気肺を防ぐことを目的としています。無気肺とは長時間に渡る酸素供給により、肺胞内の窒素が酸素に入れ替わり、肺胞内の酸素が拡散によって血管内に吸収され、肺胞内ガスがなくなり、肺胞がつぶれた状態の事を言います。
多くの動物病院さまでは窒素ガスの準備が困難なため、純酸素(酸素ポンプ)での麻酔が一般的になっています。

仕様	
サイズ	365mm×312mm×580mm
重量	約 17 kg
基本性能	最大 13L/min (50Hz) 最大 14L/min (60Hz) 50±3% O ₂
消費電力	300W (50Hz)・330W (60Hz)
安全規格	PSE 認証 (電気用品安全法) 電磁両立性 JIS T 0601-1-2

関連事業

- 新サービスのご案内 -



脳ドック検査受付開始

脳ドックは病気の早期発見・早期治療を目的として、
頭部 MRI 検査によって、
脳の異常を発見するための健康診断です。
健康診断の一環として、飼い主さまへご紹介ください。

MRI検査基本料金(撮像・読影・麻酔)+造影検査+酸素室+点滴処置

平日限定 **74,800円** 税込 ◆体重に関わらず料金一律
◆キャミック3施設で受付

結果報告

原則、当日のうちに所見書を発行。
主治医のみなさまへ診断結果
を報告いたします。

詳しくはウェブサイトをご覧ください



- 脳脊髄液検査は含まれません。
- 直近 2 年間でけいれん発作・前庭症状などの脳疾患を疑う症状を呈したことがない犬・猫が対象です。
- 外耳炎・中耳炎・クッシング症候群を疑う症例は脳ドックの対象外です。
- 一般状態把握のため、通常検査時と同様に、撮影前には血液検査・胸部レントゲン検査の結果提供をお願いします。
- 本サービスはフィルムの発行はございません。フィルムを希望される場合は、別途費用を申し受けます。
- 脳ドック受診時に病変が見つかった場合、1 年間はフォローアップ検査をご利用いただけます。(1回限り)

飼い主さま向け小冊子

犬猫のてんかん発作と MRI 検査のはなし

キャミックでは犬猫のてんかん発作についての情報をわかりやすく解説した小冊子を配布中です。
ぜひ飼い主さまへのご説明にご活用ください。
※小冊子のご請求は、同封の申込用紙またはウェブサイトよりご請求ください。



キャミック城北 細胞診検査提供開始

キャミック城北にて、超音波診断装置を導入し、
細胞診検査の提供が可能となりました。
CT 検査と同時に採取し、
一度の麻酔でもう一步進んだ診断を目指します。

Revolution Maxima
64 列 / 128 スライス
GEヘルスケア・ジャパン



超音波診断装置
ARIETTA850
富士フイルムヘルスケア



- 適応領域 : 胸腔内・腹腔内・体幹など
- 検査実施日 : 毎週月曜から木曜
- 実施施設 : キャミック城北のみ
- 検査費用(税込) : 28,600 円

※内訳:【血液凝固検査】4,400円【FNA(細胞診)】24,200円

テルコム株式会社

営業時間
9:00 ~ 18:00 (3 営業所共通)

テルコム 横浜

神奈川県横浜市北区新吉田東 8-27-20
TEL 045-947-2903

テルコム 大阪

大阪府大阪市福島区吉野 4-15-2
TEL 06-6460-7007

テルコム 福岡

福岡県福岡市博多区那珂 1-7-22
アルナーゼエッジ 1 階
TEL 092-408-8021



terucom.co.jp

動物検診センターキャミック

営業時間
9:00 ~ 18:00 (3 施設共通)

キャミック 城北

埼玉県さいたま市南区鹿手袋 2-11-5
TEL 048-606-3732

キャミック ひがし東京

東京都江戸川区東葛西 5-32-5
TEL 03-6808-2139

キャミック 城南

東京都世田谷区深沢 8-19-12
TEL 03-5752-5033



camic.jp